



A registered Political Party
ECI Registration No. 56/89/2011/PPS-I

マイ・ヒー・バーラト党 マニフェスト

スボド・チャンドラ・ロイ博士
MSc., PhD., LLB.
全国代表

バラト、すなわちインドは、独立した主権を有する民主主義国家であると宣言している。民主主義の根本原則は、多数派の意思に基づく統治を規定し、彼らの願望の実現を義務付けている。もし我々がभारतを機能する民主主義国家として受け入れるならば、ここで起こるすべてのことは、この多数派の意思の直接的な表れとして解釈されなければならない。したがって、何百万人もの人々を苦しめている蔓延する飢餓、非識字、失業、そして不健康、法的権威を装った国家の気まぐれで恣意的な行為、そして社会のあらゆるレベルに浸透している蔓延する、根深い汚職—これらすべては、我々の絶対的で、疑う余地のない沈黙を要求してい

る。なぜなら、もしこの民主主義の茶番に少しでも真実が含まれているならば、これらの忌まわしい現実のどれも、我々の明白な、集団的な同意なしには存在し得ないからだ。

父親が家族を養うように、農民は国全体を養っている。このことは論理的に、農業共同体を「国の父」という正当な称号にまで高める。しかし、何十万人もの農民が飢餓と借金によって自殺に追い込まれるという恐ろしい現実と直面したとき、このいわゆる民主主義のभारतは、一体どこにその完全な不名誉を隠すことができるのだろうか？この明白な矛盾は、たった一つの説明しか許さない。民主主義の名の下に、この国の人々は、絶え間ない、軽蔑すべき茶番にさらされているのだ。

核心的な問題に取り組む前に、蔓延する汚職の問題を考えてみよう。国民は、国家の進歩に対する主要な障害として、あらゆる犠牲を払って汚職を根絶することを求めている。不正に国外に持ち出された数十億ルピーの還流が要求されている。しかしここで、重要な疑問が生じる。これは、この国の大多数が本質的に不正直であることを意味するのだろうか？そうでなければ、このようなシステムが、いわゆる民主主義の中でどのように存続し得るのだろうか？これほど巨額の資金が、確立された法的ルートを通らずに海外に送金されることはあり得ない。これは、この略奪そのものに対する大多数の暗黙の同意を意味している。水漏れのする壺では水を貯めておくことができないのは自明の理だが、我々はまさにそのような器に水を注ぎ続けている。この欠陥のあるシステムを修理も交換もしないことで、我々は継続的で蔓延する浪費を保証しているのだ。

しかし、塩から塩分を取り除くことができないように、この国から汚職を根絶することはできない。なぜなら、不正がこの国家のまさに基盤を形成しているからだ。これを理解するためには、「法律」と呼ばれる規則や規制の真の目的を検証しなければならない。何世紀にもわたって、イギリスはこの地を、資源の自由な搾取と略奪という唯一の目的で統治した。まるで血を抜きやすくするために体の手足を縛るように、バーラタヴァルシャの人々は無数の法律によって縛られた。これらの法律は、彼らを事実上大英帝国の奴隷に変えた。

この抑圧にもかかわらず、多くの人々が独立を夢見ることが敢えてし、絞首刑を含む言葉に尽くせない拷問に耐えた。植民地支配者たちは、パンジャーブ州のジャリアンワラー・バグで、無差別の銃撃によって行われた、何千人もの非武装の罪のない老若男女の虐殺に何の悔恨も示さなかった。我々は、この恐ろしい行為は完全に「確立された法的手続きに従って」行われたと教えられた。これらの「法律」は、この地の人々の心から自由と解放の概念を消し去るという明確な意図を持って、イギリス議会によって作られたことを覚えておくことは重要だ。

無数の書物が、1947年8月15日に「インド」と呼ばれる地域が独立国家として誕生し、我々の敬愛する自由の闘士たちの夢を実現したと宣言している。しかし、詳しく見てみると、その日には、他の無数のイギリスの法律と同様に、別の法律—「1947年インド独立法」—が施行されたに過ぎないことがわかる。質問すると、事実上誰もこの法律を個人的に見たとは言わない。彼らは単に新聞で読んだり、ラジオでその日に国が「独立」したと聞いたりしただけだ。実際には、この法律は「インド」を独立国として確立したのではない。

かつてのイギリス領「インド」の中で、この法律は単に二つの「新しい自治領」—「インド」と「パキスタン」—を作り出した。以前は一つの植民地「インド」だったものが、単に二つの部分に分割された—本質的には、法的用語で「新しい自治領」と呼ばれる、行政上の便宜のための二つの植民地を作り出したのだ。重要なことに、この法律は、各自治領の行政長—総督—を選ぶ権限は、それぞれの自治領の人々にあるのではなく、イギリスの君主が総督を任命すると規定していた。これは、1947年インド独立法の第5条に明記されている。

「インド独立法」という名称であるにもかかわらず、「独立」という言葉自体がその条文のどこにも見当たらないというのは驚くべき事実だ。その前年の1946年、イギリス政府は自治領の憲法を起草するために憲法制定議会を設立した。この憲法制定議会のメンバーの中に「インドの市民」はいなかったことを記憶しておくことは極めて重要だ。「インドの市民」という用語が初めて登場したのは、1950年1月26日に施行された「インド憲法」においてである。少なくともその日まで、イギリス領土のすべての住民は法的にイギリス臣民だった。したがって、その憲法に含まれるすべてのものは、本質的にイギリス君主の意思に従属していた。この同じ憲法がこの地の最高法規であり続けており、たとえ望んだとしても、この国の自由な市民が新しい憲法と取り替えることはできない。なぜなら、憲法を置き換えようとする試みは、その「基本構造」の修正を禁止する最高裁判所の判決によって阻止されるからだ。そして、最高裁判所自体が、その同じ憲法の規定に基づいて設立されたことを忘れてはならない。

これは、かつての植民地支配者が、我々自身を統治するための正確な仕組みをも規定したことを意味する。この現実を考えると、我々の独立はどこにあるのだろうか？これをより明確に示すために、次の例えを考えてみよう。売り手が「慈悲」から土地に小屋を建て、買い手は購入後、その小屋に住むことを義務付けられている土地売買を想像してみてほしい。買い手は必要に応じて小屋を修理することはできるが、小屋を取り壊すことつまり、「基本構造」を変更すること―例えば、コンクリートの家を建てることは厳しく禁止されている。もしこの条件が売買完了後も存続するならば、法律上、売買は無効となる。なぜなら、売り手の土地に対する支配権が完全に放棄されていないからだ。

この亜大陸が激動の時期を迎えていた当時、このような条件を受け入れることが、危機を乗り切る唯一の方法のように思えたかもしれないことは認めよう。しかし、その場合、憲法には、「独立」後、議会在憲法を批准し、必要に応じて古い憲法に代わる新しい憲法を制定する権限を持つことを明記する条項を含める必要があった。明白なように、そのような批准条項は憲法の中に存在しない。これは、「インド」として知られるイギリス自治領のために設計され、イギリス君主に適した憲法が、この地の人々に最高法規として押し付けられていることを意味する。これは、イギリスの支配と搾取からभारतの人々を解放しようとした、我々の尊敬する自由の闘士たちの夢とは著しく対照的だ。この解放のための根本的な要件は、イギリス臣民を永続的な隷属状態に保つように設計された、「法律」として知られる抑圧的なイギリス製の足かせを解体することだった。

1947年8月15日以降も、1950年1月26日以降も、現在「インド」として知られる地域では、イギリス製の法律の大部分

が施行され続けた。「憲法」内の規定を通じて、これらのイギリス製の法律は新たな命を与えられ、何世紀にもわたって人々を動けなくしていたのと全く同じ制約を維持した。その結果、この国は容赦なく略奪され続けており、人々はほとんど理解していない法律によって巧妙に罠にかけられている。現在の推定では、インドの裁判所では常に約3000万件の訴訟が係争中であるとされている。各訴訟に少なくとも10人が直接的または間接的に影響を受けていると仮定すると、 भारतの約3億人が常に法的不安に悩まされていることになる。毎年聞く、いわゆる「包摂的な成長」に関する絶え間ないレトリックにもかかわらず、彼らの状況が改善しないのは当然のことだ。

我々がまだ真の解放を達成していないという事実は、我々の日常生活において明らかだ。1947年8月15日以前は、イギリスの支配に対する非暴力および暴力的な抗議が日常茶飯事であり、王室警察は日常的に自由の闘士たちを残忍に迫害することで対応していた。警察は、王室の僕として、主権者の利益を守るために残忍に行動する義務を負っていたため、当時はこれは理解できた。しかし、 भारतが政治的に独立したとされる後でも、同様の警察の残虐行為が依然として蔓延していることは非常に憂慮すべきことだ。もしこの独立が本物ならば、警察は今、誰の利益を守っているのだろうか？もし民主主義が本当に人々をこの地の支配者にしたのなら、なぜこれらの同じ人々が抗議しているのだろうか？もし民主主義のように、我々が法律を作る者であるならば、なぜ我々が作ったまさにその法律を破るように駆り立てられるのだろうか？今こそ、これらの問題に正面から向き合う時であり、我々—この地の人々、我々全員、単に人間として—が、自らそうしなければならない。

この文脈において、「国」という言葉の真の意味を考察しなければならない。人間が住む領域、それが我々が「国」と呼ぶものである。人間がいなければ、国は存在し得ない。例えば、月は広大な広さにもかかわらず、無人であるため国ではない。これは「人間」と「国」の密接な関係を示している。論理的に考えれば、国を構成する人々を置き去りにして国が発展することはないため、国の発展は国民の進歩を反映するはずだ。この国の大多数の人々は、何らかの人工的な進歩の尺度で「遅れている」とよく言われる。それは意図的な誤った表現だ。この捏造された差別を永続させるために、大多数の人々は意図的に不利な状態に置かれている。社会の始まりから、特権を持つ少数の人々が勤勉な大衆の労働の恩恵を享受できるように、差別の種が注意深く蒔かれたのだ。

もし、その労働が不可欠な人々が結束してまとまれば、特権を持つ少数の人々は、社会の大多数に対する支配を維持できなくなるだろう。したがって、人々の間に差別を助長することによって、彼らは分断され、弱体化した個人に貶められてきた。そのため、彼らは何世紀にもわたって耐えてきた苦しみに疑問を呈することをほとんどしない。このパターンは、深く根付いた伝統的な考え方が根本的に変わらない限り、永続するだろう—そして、この変化をもたらす力は、人々自身にある。国を変えるためには、まず自分自身を変えなければならない、そのためには、独立した思考能力が必要となる。しかし、人間がいなければ、国の概念そのものが無意味だ。したがって、国内のあらゆる人間の行動に対して、人々自身が責任を負う。「我々」は「私」の複数形であるため、私は本質的に国である。私はそれを直接作り出した。私がいなければ、国は存在し得ない！

誰かが「このような取るに足りないと思われる考えが、本当に国の現状を改善できるのか？」と尋ねるかもしれない。答えは断固としてイエスだ。なぜなら、「私」の変化は必然的に国の変化を意味するからだ。それでも、「もしこの考えがそれほど強力なら、人々の悲惨さはどうの昔に終わっていただろう。それに、国は宇宙技術において目覚ましい進歩を遂げるなど、著しく進歩している。あなたの論理では、これは人々の生活水準の大幅な改善を意味するはずだ」と反論する人がいるかもしれない。これに対し、我々はこの進歩の恩恵は人口のごく一部の人々だけが享受しており、大多数は排除されていることを認めなければならない。飢餓、栄養失調、自殺は依然として大多数の人々の間で蔓延している。この格差の根本原因は、単に「私が国である」という考えがまだ社会に浸透していないことにある。

まさにこの意識の欠如が、国の嘆かわしい状況を変えられない原因となっている。もし人々がこの事実を目覚めたなら、それは間違いなく、冷酷な搾取の上に築かれた社会システムに大きな混乱を引き起こすだろう。そのような事態を防ぐために、少数の搾取者たちは意図的にこの考えをユートピア的だと否定している。彼らは、もし人々が社会における自分の真の立場を認識すれば、彼らの腐敗した構造全体が崩れ落ちると恐れているのだ。しかし、真実は、この考えはユートピア的ではないだけでなく、このいわゆる文明化されたシステムを解体するための非常に簡単な方法でもあるということだ。この明白な道筋を隠しておくために、最初から大多数の人々を非識字と貧困の暗闇の中に閉じ込めておく努力がなされてきた。今こそ、出口を見つける時であり、我々はこの目標に向かって努力しなければならない。なぜなら、我々こそがまさにこの国の具現だからだ！

複雑な理論に頼らずにこの国の状況を理解するために、賑やかな祝宴が開かれている大きな家の例えを使ってみよう。夜になり、家は明るく照らされ、客は楽しんでいる。突然、悪意を持って誰かが主電源を切る。家全体が暗闇に包まれ、すぐに混乱が起こる。人々は恐怖を感じて逃げようとするが、暗闇が彼らを妨げ、混乱とパニックにつながる。彼らは互いに躓き、家具はひっくり返され、全体的な混乱が支配する。そこで問題となるのは、この果てしないと思われる混乱からどのように脱出するかということだ。

電気に不慣れな人々にとって、この混乱を解決することは非常に難しいように思えるかもしれない。中には、この状況を意地悪さや利己心といった人間の否定的な特性のせいにする人もいるかもしれない。しかし、解決策は非常に簡単だ。主電源のスイッチを「オン」に戻すだけでいい。光が戻るだけで、暗闇によって引き起こされた混乱はたちまち解消される。同様に、この広大な土地のすべての問題の根本原因は、我々の心の中の無知の暗闇の中に隠されている。この無知が根絶されない限り、これらの問題は永遠に続き、我々は暗闇の中で互いを友人として認識することができず、敵として戦い続けるだろう。しかし、我々は理解しなければならない。誰も意図的に明かりを消したのではない。人類文明の歴史において、完全な意識の光が本当に灯されたことはない。これが、世界中のほとんどの人々が独立した思考を奪われてきた理由だ。しかし、我々は、この不可能と思われる、内なる真の力に気づくという課題に身を捧げることを決意している。そして、今こそその時なのだ。

まず、この国の名前について考えてみよう。古代から、この国は「バーラタヴァルシャ」として知られていた。シンドウ川

のほとりでは文明が栄え、それは外国語でインダス文明として知られるようになった。しかし、この文明が勃興する以前から、叙事詩ラーマーヤナの記述に見られるように、この地の南部には高度な文明がすでに存在していた。しかし、外国からの侵略者たちは、自分たちの目的のために、「インダス文明」という用語を作り出し、この地全体を包含し、国を「インディア」と名付けた。奇妙なことに、「独立」後も、この偉大な古代の地は、いまだに公式に「インディア」と呼ばれている。個人が複数の名前を持つことはあるかもしれないが、一つの土地が「インディア」と「バーラト」という二つの公式名を持つことができるだろうか？

我々の深く根付いた隷属の一つの明確な例は、憲法自体の中に見られる。そこでは、国は「インディア、すなわちバーラト」と名付けられている。表現が「バーラト、すなわちインディア」となっていないのは示唆的だ。「インディア」という名前が優先されているのは、おそらくかつてのイギリスの支配者たちの都合のためだろう。我々は自らを真に独立していると宣言しているのだから、「インディア」を拒否し、「バーラト」を国の唯一の名前として採用すべきだ。多くの人々が「マハーバーラト」を学んできたが、「マハーインディア」というものを聞いた人はいない。「インディア」という言葉を我々のバーラトから追放しよう。それは過去の隷属の痕跡に過ぎないからだ。

真の意識の灯火が灯されることがないため、人々は真の自由を経験したことがない。組織化された社会の始まりから、支配権は「王」の手に委ねられてきた。彼の命令は法律となり、彼の言葉は最終的なものとなった。しかし、我々は、すべての法律の源とされる王の「王権」そのものが、根本的に不正であることを認識していない。繰り返そう。我々

は、複雑で優雅な理論に頼らずに、この問題に直接取り組む。

これを説明するために、人類社会が形成される以前の先史時代のある日を想像してみよう。小さな川が流れ、その岸辺にはマンゴーの木が立っている。一人の男が木に登り、マンゴーを摘んでいる。少し離れたところでは、別の男が魚釣りをしている。そこに三番目の男が現れる。彼らをしばらく観察した後、彼は木にいる男に近づき、「何を摘んでいるのですか？」と尋ねる。男は「果物だよ。一つ食べてみないか？」と答える。見知らぬ男は熟したマンゴーを受け取り、美味しいと思い、その「マンゴー男」に感謝し、それから魚釣りの男のところへ行く。同様のやり取りの後、彼は魚を贈り物として受け取り、「魚男」に感謝する。

翌日、見知らぬ男は友達を連れて戻ってくる。彼らはまずマンゴー摘みの男を訪ねる。新参者もマンゴーを食べたがっていると知ると、木にいる男はそうすることを光栄に感じ、さらに熱心に果物を分け与える。彼らはそれから魚男にも同じことを繰り返す。見知らぬ男たちは、何の努力もせずにマンゴーと魚を食べることで、労働者たちのほぼ倍のエネルギーを得ていることに注目してほしい。労働者たちは木に登ったり魚を捕ったりするのにエネルギーの約半分を費やし、見知らぬ男たちは何も費やしていない。このようにして、欺瞞を通して、三人目の男は他人の労働の果実を消費することで徐々に力をつけていく。彼の力と影響力が増すにつれて、人々は彼を恐れ始める。かつて好意で自由に与えられていたものが、やがて強制的な「用心棒代」となり、最終的には彼を立法者、そして王として確立する。これが、「法の支配」の名の下に、王による人々の搾取の始まりとなる。

この狡猾な人物は、欺瞞—言い換えれば、不法に—を通して「王権」を始めた。善意から与えられた慈善行為として始まったものが、強制的な徴税、つまり税金の徴収へと変わった。これらの税金を人々から円滑に徴収するために、さまざまな政策が時代を超えて実施されてきた。そのようなシステムの一つで、今やほぼ聖典の地位にまで高められているものは、経済学と呼ばれている。「カこそ正義」が支配的な原則であるため、王は何も間違えることがなく、常に間違いなく正しいと見なされる。主権者の命令が法律であるため、法律を遵守する臣民は王に従う義務がある。

人々は自ら進んで王の主権を受け入れたのではなく、武力によって服従させられたのだ。しかし、王は、自身の存在が完全に従順な臣民の存在にかかっていることを痛いほど認識している。これらの臣民が、自分たちがすべての力の真の源であり、皆平等であり、同じ人類に属しているということに気づいていないという事実が、この搾取システムの始まりから彼らの間に分裂を生み出してきた。貧富、教育のある者とない者、身分の高い者と低い者という区別を超えて、無数の他の人工的なカテゴリーが綿密に作り上げられ、異なる宗教、カーストなどが作り出された。このようにして、人々は無数のグループに分けられてきた。自然界には存在しなかったし、存在し得なかった分裂だ。世間知らずの臣民たちは、無意味な内紛に気を取られ、王によるこの狡猾な策略に気づかなかった。これが、君主制の触手が人類社会を完全に飲み込んだ方法だ。このことを考慮すると、「貧しい」という言葉は誤称であることを認識することが重要だ。慣例では、例えば炭鉱労働者のように、日々の生存—例えば、炭鉱労働者—のために苦勞している人は「貧しい」とされている。毎日命を危険にさらしながら、彼は炭鉱に降りて石炭を採掘する。石炭がなければ、石炭火力発

電所が存在し得るだろうか？石炭に依存する巨大産業は存在し得るだろうか？最終的に、この莫大な富の真の源は、まさにその「貧しい」労働者なのだ。では、そのような巨大な富のまさに創造者を、どうして「貧しい」と呼ぶことができるだろうか？

では、「教育を受けていない」という言葉について考えてみよう。いわゆる「教育を受けた」我々は、農民や靴職人をどうして教育を受けていないと決めつけることができるのだろうか？教育を誇る我々が、農民や靴職人が容易に行う作業をこなすことができないということに、我々は決して気づかない。それでは、我々も彼らの技能においては無学なのではないだろうか？彼らが正式な教育を受けていないことが多いのは、そのような機会を奪われてきたからだ。それは、わざと誰かの足を折っておいて、その「不幸」を憐れむようなものだ。

君主制に続いて、いわゆる民主主義が生まれた。王の権力への羨望に駆られた特定の人々が、支配権を奪取しようと企てた。彼らは真の権力が人々にあることを理解していたため、「民主主義」の中で「デモス」(人々)という言葉を使い、表向きは人々が国のことを直接管理するという考えを伝えた。しかし、現実には「民主主義」は単に君主制の別の形に過ぎない。唯一の違いは、君主制のように一人の王ではなく、「民主主義」には複数の「大臣」がいるということだ。

王の権力を施行するために奴隷の足かせを維持しなければならなかったように、いわゆる民主主義においても、人々の絶え間ない略奪を確実にするために、君主制時代のすべての法律が保持されている。その結果、富の提供者としての人々の役割は、君主制の下であったのと全く変

わっていない。したがって、民主主義において「我々は皆王である」という広く喧伝されている考えは、現実に基づかない、純粹に詩的な空想だ。「民主主義」では、人々の代表が国のことを「指揮する」と言われているが、実際には、政党によって選ばれた特定の人々が国を「支配している」。我々がいまだに「与党」という言葉を使っているのは偶然ではない。「自由」が達成された後にどうして「支配者」が存在し得るのか、あるいは「民主主義」において「政府」という言葉の妥当性さえも、誰も疑問に思わない。

この国では、1951年人民代表法に基づいて選挙が行われているが、これらの選挙に「立候補する」人々は、人々の真の代表ではない。ほとんどすべての場合において、彼らは何らかの政党によって支配されている。したがって、彼らの第一の責任は、人々ではなく、彼らの党にある。すべての選挙候補者が、国の市民の福祉を優先すると考えるのは妥当だろう。また、政党がこの目標を達成するための明確で明確な計画を持っていると期待するのも妥当だろう。もしこれが本当なら、なぜ選挙に「勝つ」ためにこのような激しい競争があるのだろうか？簡単な例えを考えてみよう。もし数人が家の塗装に最適な色について議論しているとしたら、ある人は白、別の人にはピンク、三人目は灰色を提案するかもしれない。しかし、彼らは皆、家を美しく見せるという共通の目標を共有しているはずだ。もし彼らが敵同士でなければ、なぜこの同じ協力的な精神が政治に存在しないのだろうか？それは、相互の敵意を維持することが、搾取的な現状を永続させるために不可欠だからだ。したがって、国家システムに根本的な変化がなければ、人々の真の進歩と状況の改善は不可能であることが明らかだ。この変化を達成するためには、まず我々の弱点の源を排除しなければならない。

我々はしばしば、一人の人間がどうしてシステム全体の惰性を変えることができるのかと疑問に思う。第一に、我々は、現在の国の状態が、我々の集団的な不作為の直接的な結果であることを認識していない。この惰性は、我々が行動し始めれば必然的に終わる。第二に、私は一人ではない。13億人以上の「私」が集まって、現在の「インド」を構成している。それぞれの「私」は、人体を構成する無数の細胞のように、他の「私」と密接につながっている。体が傷つくと、体全体が一度に反応し、何兆もの細胞が協力して攻撃を防ぐ。これは、一つの細胞が他の細胞とつながったときの莫大なエネルギーを示している。同様に、我々一人一人は、我々がほとんど気づいていない巨大な力の貯蔵庫なのだ。

この地のすべての人々が、我々は皆同じ家族の一員であり、互いに補完し合っているということに気づいたとき、我々の集合意識は目覚めるだろう。理想的な家族のように、汚職の居場所がないように、国に汚職が存在する理由もなくなるだろう。家族の全員で問題を共有するように、我々も国のどの地域で発生した問題も共有するだろう。どこでも誰も飢えることはないだろう。これは同時に、人々の心から憎しみ、羨望、嫉妬のすべての原因を根絶するだろう。

さらに、世界における人類の地位が最も重要であると考えられているため、お金は従属的な位置を占めるべきだ。しかし、現実はその逆なので、我々はお金の役割を意識的に再評価しなければならない。お金でさえ、人類よりも上位にあるべきではない。「民主主義」は誤称なので、この理想的なシステムに新しい名前を与えよう。人々の存在が国を構成するため、我々はベンガル語で「ガナサッタ」という用

語を作り出した。そのような状態では、人々が国の運営のあらゆる側面で最高の役割を果たすことを意味する。

ガナサッタの下では、このような状況は劇的に変化するだろう。人々は選挙後も真の権力を行使するだろう。選出された代表者は、選挙人の意向でのみ役職に留まることを保証する適切な選挙法改正が、関係当局によって制定されるように働きかけるべきだ。これは、人々が必要と判断したときはいつでも、選出された代表者をリコールする権限を持つことを意味し、汚職を根源から効果的に根絶する。そのようなリコールの可能性だけでも、役職に就いている人々に明確なメッセージを送ることで、状況を大幅に改善するだろう。

ガナサッタがしっかりと確立されると、我々一人一人が、自身の存在が完全に他者の幸福にかかっていることに徐々に気づくだろう。我々は誰よりも上でも下でもない。誰もが等しく重要なのだ。その結果、人体内の何兆もの細胞の間に敵意がないように、我々の間にも敵意はなくなるだろう。足、脳、その他の体のすべての部分は同じ細胞で構成されており、それらは等しく不可欠であることを覚えておくことは重要だ。しかし、この自然な調和は人間社会には存在しない。理由は簡単だ。太古の昔から、人々が団結するのを防ぐために、「王たち」によって表面的なレッテルや分類を通して、人為的に分裂が作り出されてきた。これが、真の人間が「多様性の中の統一」という誤解を招く、多色のスローガンの下に隠されたままである理由だ。この真の人間が目覚めて支配権を握ったとき、ガナサッタが確立され、ガナサッタの中に世界の未来がある。

そのような社会システムを確立するために、「マイ・ヒー・バーラト」(私はバーラトである)という政党が結成された。我々はこの地のすべての人々が同じ家族に属していると確信しているため、我々は皆、国の全体的な進歩を望んでいるため、真の障害はあり得ない。我々と一緒に、共に前進しよう。この国—それは我々の未来でもある—の未来は、我々が思い描くとおりになるだろう。なぜなら、我々—私—がいなければ、バーラトは存在しないからだ。

マイ・ヒー・バーラト！

マイ・ヒー・バーラト憲法 抜粋

第2条 目的及び目標

党の中核となる目的と目標は、भारतの全人口を一つの大きな家族に統合することである。前述の家族のすべての構成員は、宗教、人種、カースト、性別、社会的地位など、彼らを永久に分裂させている外部からの人為的な区別に関係なく、あらゆる点で平等な、個々の自然な人間としてのみ認識されるものとする。

党は、バラトに住む人々の苦しみの根本原因は、彼らの圧倒的多数が常に意思決定の主流プロセスから遠ざけられ、ほんの一握りの人々が、残りの人々を知的な人間ではなく単なる数として無視し、自分たちの選択に従って国のこ

とを操っているという事実にあると固く信じている。何十年も具体的な変化を生み出せずに過ぎ去った今、 भारतがあらゆる分野で卓越できるように、人々自身が直接状況を掌握する時が来たのだ。

人間の居住者がいて初めて、ある領域は国となる。したがって、この国のすべての居住者は、実際には भारतと同義である。彼自身が भारतであるという認識を持って初めて、すべての個人に、国家建設という神聖な任務に優雅に進んでいくための莫大な自信を植え付けることができる。したがって、党の名前は「マイ・ヒー・バーラト」である。

この中心的なテーマに導かれ、党は以下の行動方針をとるものとする。

自由な個々の人間の主権に最大限の敬意を払い、彼らのそれぞれが共通の遺産を持ち、この地の支配者の一人であり、彼らの明確な命令なしにはこの国で何も動かないことを認識すること。

個人間の敵意を引き起こす摩擦の要因に過ぎない貧困、非識字、社会的差別などは、搾取のために彼らを永久的な隷属状態に置いておくために意図的に作り出されていること。

貧しいと表現されている個人は貧しいのではなく、むしろ、彼こそが富の唯一の源泉であること。

人々は自由であると言われているにもかかわらず、いわゆる「法律」の名の下に植民地支配時代に作られた臣民の奴隷化の手段は、すべての血を吸う触手とともに、いまだに完全に効力を発揮していること。そして、既存のシステムは

人々の共通の願いに従属するものであり、支配の手段として機能することはできないことをさらに認識し、「マイ・ヒー・バーラト」は、भारतのすべての居住者に、力と自信を持って国のことを気にかけるように呼びかけることによって、蔓延する社会、経済、政治、法制度を根本的に変えるために、あらゆる点で熱心に貢献するものとする。